

書評：リチャード・フロリダ著・井口典夫訳（2008）「クリエイティブ資本論 新たな経済階級の台頭」ダイヤモンド社。Florida, R. 2002. *The rise of the creative class*. New York: Basic Books.

鈴木晃志郎*
Koshiro SUZUKI

1. 本書の背景

人のクリエイティビティを無形の資本とみなし、新しい社会階層論をうち立てようとする野心的な試みである。著者のリチャード・フロリダはトロント大学ロットマン・スクール・オブ・マネジメント教授。2002年に発表した本書がワシントン・マンスリー誌の最優秀政治書籍に選ばれ、一躍、第一線の都市経済学者として認知された。本書はその邦訳版で、青山学院大学総合文化政策学部教授の傍ら、NPO 法人渋谷・青山景観整備機構の理事長を務める井口典夫氏が訳出を行っている。

クリエイティブ・クラスの台頭には、経済体制がフォードイズムの大量生産体制から多品種少量生産に特徴づけられるポスト・フォードイズムへとシフトしてきたことと、文化の大衆化とグローバル化に伴い、場所固有のローカルな文脈から離れたイメージや意味としての文化消費が進み、地理的障壁が崩壊してきたことの2点が背景にあると考えられる。前者は、工業都市、商業都市といった産業立地上の空間的制約を軽減し、生産拠点の流動化をもたらした。また後者は、流動化した資本を引き寄せるため、旧来的な場所性にとらわれることなく、都市空間に新たな様式や意味を与える試みへと結びついた。このような社会の下では、地域は世界規模で気まぐれに変化する消費や需要の動向にフレキシブルな対応を迫られる。ゆえに、地域は「計画、組織、雇用制度、調達関係等ほとんどあらゆる側面において固定的・安定的なシステムから柔軟なシステムへの移行を余儀なくされ」る(渡部 2004, p.111)ことになった。

それまで、労働人口の多勢を占めていたのは、高度化された組織の分業体制に順応し、与えられた作業を計画に沿ってこなすワーキング・クラスやサービス・クラスであった。しかし、前述した社会変化は、広汎な業種において「関連する知識体系を複雑化し、クリエイティブな知識を応用する創意が重視される」(p.87)傾向を強化していった。フロリダの注目するクリエイティブ・クラスも、こうした時代背景のもとで生まれ



てきた新しい労働階層である。

すでに関連分野において、彼らは「知的労働者」(マッハルプ)あるいは「専門・経営職」(ライト),「Xクラス」(ファッセル)などと称され、旧来的な職種分類をもとに定義づけられてきた(p.83)。一方、フロリダの提唱するクリエイティブ・クラス概念は、高い創造性・自律性・労働裁量権をもち、「転用可能で汎用性の高い新しい形式を生み出す」(p.86)仕事に従事し、クリエイティビティによって自らに経済的価値を付加する人々を指した職種横断的な枠組みであるところに新しさがある。

2. 本書の概要

クリエイティブ・クラスは、「スーパー・クリエイティブ・コア」と、「クリエイティブ・プロフェッショナル」の2層からなる(pp.85-86)。前者はクリエイティブ・クラスの中核で、(1)コンピュータ及び数学、(2)建築及びエンジニアリング、(3)生命科学、物理学、社会科学、(4)教育、訓練、図書館、(5)芸術、デザイン、エンタテインメント、スポーツ、メディアの、各々に関連する職業に従事する者があてはまる。一方後者は、知識集約型産業で働く労働者であり、(1)マネジメント、(2)業務・金融サービス、(3)法律、(4)医療、(5)高額品セールスおよび営業管理、のそれぞれに関連した職業の従事者が該当する(p.412)。

フロリダによれば、これらの階層に属するアメリカのクリエイティブ・クラスはこの半世紀で急速に増加し、1999年現在、国内労働人口の約30%(3,800万人)を占める主流派になってきた。その結果、「人々の働き

*首都大学東京大学院都市環境科学研究科観光科学専修
〒192-0364 東京都八王子市南大沢 2-2 (パオレビル 10 階)
e-mail mapping@comp.metro-u.ac.jp

方から価値観や欲望、日常生活そのものに対して重大な影響を」(p.xix)及ぼすまでになり、現代の社会・経済構造やその変化を理解する上で、もはや無視できない存在になっているという。

クリエイティブ・クラスに属する人間は、(1)個性や自己表現を強く好み、組織や制度の命令や因襲的な集団思考の規範を受け入れない「個人志向」、(2)野心的で、能力や努力によって昇進したいと考える「実力主義」、(3)人種、民族、性別、性的指向、外見で区別されることを拒む「多様性と解放性」の3つの価値観によって特徴づけられる(pp.95-98)。

ポスト・フォードイズム社会では、縦型の管理制度に代わり、「自主管理、同僚による評価のプレッシャー、自発性などに基づく新たな形態の管理制度が生まれた」(p.17)。このような社会においては「自分の仕事や技術に対して報酬が与えられる一方、仕事を通じて学び、成長し、職務内容を決定し、自身の計画を管理し、アイデンティティを表現する能力が求められる」(p.17)。ゆえに、「新しい発想、新しい技術、新しい作品のいずれか、またはすべてをつくり上げること」ができ、「長期的に見て何かをつくり出せる、つくり続けられる人たち」(p.7)は付加価値の高い労働者として、高給や裁量労働などの厚遇を受けるようになる。これがクリエイティブ・クラスの人々である。

いわば知のフリー・エージェントとしてこの要求を満たし続けるため、彼らは自らの手で絶えず自分の能力・技術を望ましいレベルに高め、それを保つことに全精力を注ごうとする。安定した賃金や雇用よりも「やりがいのある仕事や刺激を好」み(p.96)、「決まり切ったルーティン・ワークを辞め、時間のかかる起業に参画し、賃金労働よりも志願労働を優先する」(p.195)のもそのためである。従って、旧来的な労働観念では雇用者による搾取とされ、労働者にとっては苦痛なはずの長時間労働も、クリエイティブ・クラスにとっては“したいときに労働する権利”と認識され、むしろ彼らは「したいことをするだけの十分な時間がないことに対して不満」(p.195)をもつ。終身雇用や年功序列賃金が崩れる一方で、裁量労働制が定着した背景にも、クリエイティブ・クラスの台頭によって価値観の変革が起きていることが関係しているというわけである。

実は評者自身も、フロリダの分類では典型的なクリエイティブ・クラスに属している。同級生が次々と就職し、まっとうなサラリーマン生活へと入っていくのを横目に、研究の道に進むべく一人故郷を離れ、ときに海を渡って留學生活を送り、博士号を取得するまで象牙の塔に籠もって生活してきた。就職した後も大学

に半ば棲み着くようにして研究生生活を送り、労働時間や事務手続き上の因習・束縛を嫌って昼夜逆転の生活をしながら、暇さえあれば読んで書いてきた。本業のかたわら、畑違いの領域に匿名のウェブサイトを抱え、頼まれもしないのに無報酬でせっせと雑文をアップロード。そんな自分を、社会的にどう自己規定したら良いのか。一度も困惑しなかったといえは嘘になろう。本書によって定義される「クリエイティブ・クラス」としての自己は、風変わりな評者の社会的アイデンティティ

を、巧妙にアドレスしてくれた。ハタと膝打つ心持ちになったことだけは確かである。

本書が日本で少なからぬ反響を得たのは、フロリダがクリエイティブ・クラスという新たな概念を提唱したからだけではない。冒頭で述べたように、低成長時代に入った日本の地方自治体では、ビジターやツーリストにとって魅力ある地域へと再生させるべく、多くの知識人や実務家たちが知恵を絞っている(e.g. 橋爪2002; 渡部2004)。フロリダの示した仮説は彼らにとって、「魅力ある地域を創造し、地域の再活性化をうながすには、魅力ある人々(クリエイティブ・クラスの人々)を引きつけることが肝要だ」との提言でもあった。

フロリダによれば、自らの財産であり職能であるクリエイティブ・クラスの人々は「自分が選んだ仕事を追求し、文化装置を通じて多彩なライフスタイルが楽しめ、クリエイティブな人間というアイデンティティを反映し強化することのできる場所」を好む特徴がある。そして「伝統が重んじられ、組織の時代の社会規範がいまだに主流である場所からは、ますます逃げ出すように」(p.15-16)になっているという。さらに驚くべきことに、彼らの地域間・組織間移動に伴って「仕事のために人が移動するのではなく、優れた技術を持つ人のいる地域へ企業が移転し、またそうした地域に新たな起業が設立されるという逆転現象が起きて」(p.xx)いた。フロリダは、クリエイティブ・クラスと製造業・サービス業の平均賃金をもとに全米各都市の「経済格差指数」を計算し、クリエイティブ経済の中心地ほど格差が大きいことを実証した。

フロリダは、クリエイティブ・クラスにとって魅力ある場所について、技術(Technology)、才能(Talent)、寛容性(Tolerance)の「3つのT」(p.367)が重要とする。イノベーションやハイテク産業の集積(=技術)があり、効率的に才能ある人を引きつける大学が立地するような先端研究拠点は、人口比のクリエイティブ・クラスの居住率が高く、多様な価値観の相互作用が豊かで、

常識にとらわれない発想を押さえ込まない「寛容性」の高い場所であるとし、このような“人の参入障壁が低い”場所が、クリエイティブな才能を引き出す潜在力をもった場所になるとした。また、ゲイ指数、ボヘミアン指数、メルティングポット指数(外国人移民の集中度)、人種統合指数の4変数からなる『寛容性指数』(p.ix)により、地域の人的資源の多様性を評価できると主張している。

クリエイティブ・クラスの人々は、自らのクリエイティビティを高めることによって市場価値を高め、転職しながら成功へと上りつめようとする人々である。クリエイトは、「情報、知覚、材料を取捨選択して新たに有益な組み合わせを考え出す作業」(p.38)でもあるため、限られた時間でできるだけ多くの刺激に触れる必要がある。ゆえに彼らは「あらゆる種類の人を受け入れている」、「偏見のない多様な文化が根底にある」地域へと移動していく(pp.vi-vii)。従って、そうした人材を取り込むことができる場所が、より高い競争優位性を確保できる、これがフロリダの議論において、ひとつの核をなしている。

地域住民相互の紐帯(社会関係)が強化されることによって無形の資本を生み出す効果に一足早く着目したソーシャル・キャピタル論(Coleman 1988)が、いわば内発型の地域活性化を志向するのに対し、フロリダの唱えるクリエイティブ・クラスの力を取り込んだ地域活性化は外発型を志向する。ソーシャル・キャピタル論では、市民の経済的収入や教育水準よりも、自発的な協力や相互の信頼感に代表される市民的徳性(civic virtue)の違いが、制度の実効性に格差を生じさせていたとする(パットナム 2001)。公共心に基づく共同体の統合を志向するパットナムの議論は、逸脱行動論的な視座に立つクリエイティブ・クラスの発想とは対極的といえよう。事実フロリダはパットナムの説に異を唱え、文中で幾度か批判的に紹介している(pp.21-22; pp.346-347)。

3. クリエイティブ・クラス台頭の光と影

示唆に富む本書であるが、読後にはいくつかの疑問が残った。わけても、本書がアメリカ国内におけるクリエイティブ・クラスの台頭とサービス・クラスの増加(p.93)にのみ注目し、それに呼応するように減少した他の労働階層への需要がどこに消えてしまったのかについて、ほとんど論じていないのは不可解であった。

社会心理学者マズローによれば、生存や承認の欲求を満たされた人間が、最後に到達するのは自己実現の欲求である(ゴープル 1972)。クリエイティブ・クラス

は、生まれつき生命や安全の不安にさらされることなく、自己実現の態度を肯定されてきた、いわば勝ち組たちの形づくる社会集団である(p.101)。賃金や社会的安定よりも自己実現を重視するクリエイティブ・クラスが無視できない存在になったとの指摘(pp.99-100)は、低成長時代の先進国の社会階層構造においては、増大する彼らと他の階層との間で需要-供給のマッチングがとれた状態が成立しうることを表しており、アメリカならずとも、先進国の社会では大なり小なり普遍的にあらわれる傾向とみてよい。

クリエイティブ・クラスの台頭は、彼らを支えるサービス・クラスの増加とセットになっており、サービス・クラスの増加は、農業従事者の減少を相殺する関係にあるという(p.93)。フロリダ自身は、現代社会では「低賃金の仕事は、それがクリエイティブではないがゆえに低賃金」(p.404)なのであり、「多くの人のクリエイティビティを開発し、あらゆる人がクリエイティブ経済に組み込まれるようにすること」(p.403)が、格差をなくすためにクリエイティブ・クラスの人へ課せられた道徳的義務だとしている。しかし、先進国でこうした階層構造の変化が普遍的に起こるとすれば、未来の階層間搾取は国内ではなく国家間のレベルで、もっといえば先進国と発展途上国や最貧国の間で進んでいくことになる。アメリカ国内でクリエイティブ・クラスがワーキング・クラスを凌駕したように見えるのは、アメリカがすでに、ポスト・フォードイズムの状態にある先進国だからに他ならない。

世界最大の移民国家であるアメリカはかつて、ユダヤ系移民の知識人・富裕層を取り込んで、のちの発展の礎とした(鈴木 2003; 堀 2000)。しかし、ユダヤ移民の多くは当初ゲットーに暮らし、極貧のなかで低劣な労働に従事していた(天川 1984; 野村 1984)。こうした階層間搾取の構造は、現在ではヒスパニック系移民のおかれた状況にあらわれている。

米国勢調査局が公表した 2005 年の人口統計(2005 年 7 月 1 日現在)によれば、総人口の 66.9%は依然として非ヒスパニック系白人で占められているものの、ヒスパニック人口は 14.4%(4,270 万人)であり、12.8%(3,790 万人)の黒人を抜き、米国最大のマイノリティになった。また、2000 年から 2004 年にかけてのヒスパニックの人口増加率は 17.0%で、黒人の 5.7%を大きく上回っている。

2005 年 3 月時点で米国内の不法移民数は 1,110 万人で、うち就労者は 720 万人(全就労者の 4.9%)を占め、その 56%はメキシコ出身である。これら不法移民就労者は農作業 24%、清掃 17%、建設 14%、食品製

造 12%に従事し、これら 4 分野が全体の 67%を占めるという（内多 2006）。推計値の形でしか数字に表れてこない不法移民を、いわば低劣・安価な労働力として使役することによって、クリエイティブ・クラスの台頭は下支えされている面がある。

同じ現象は、国家間においてもみられる。代表的なものとして知られるのが「南北問題」である。国際的な交易条件の経年変化を検討した石戸(2007) は、発展途上国の交易条件が経年的に悪化しており、自国の輸出価格が外国からの輸入価格に比して相対的に低下していることを明らかにした。一方先進国の交易条件は逆に良化していることから、現代国際経済システムにおいては、貿易に伴う取引格差（不等価交換の度合い）が地球規模で拡大していると特徴づけることができる。社会階層としてのクリエイティブ・クラスの台頭の影には、それに伴って人種や国境を越えて拡がりつつある階層間搾取の拡大がないだろうか。それら空間的・社会的な不正さへの目配りがほとんど感じられない点で、社会階層論としての本書は、いわば「勝者の経済学」であるとの印象も拭えなかった。

原著の出版からおよそ六年。サブプライムローン問題に端を発する世界的な信用恐慌と経済不況の到来で、聞こえはよいが雇用が不安定な「知のフリー・エージェント」たちのメッキが剥がれかねない昨今、彼らを最大限に讃美して脚光を浴びた本書の邦訳版が出るようになったのは、何かの因果だろうか。

4. おわりに

本稿では、主に階層論の観点から、クリエイティブ・クラス概念の評価を試みた。しかし、他にも本書には、幾つかの興味深い指摘が隠れている。代表的なものが、ジェンダー論への示唆である。

社会関係を必要最少限まで希薄化し、関係の質よりも量を志向する彼らの台頭の影には、社会の非婚・晩婚化や不妊化が不可避的について回る。なぜなら、クリエイティブ・クラスはボヘミアンであり、より良く自己実現できる場を求めて自由に組織や地域を渡り歩いていく存在であるからだ。実力本位主義的で組織の年功序列制度にも依存しない彼らは、「躍進できる可能性が最も高く、純粋に体力がピークである若い時期に、最も骨の折れる生産的でクリエイティブな仕事を集中させ」、結果的に「結婚や育児といった時間の掛かる義務は先送り」する傾向がある（p.19）。フロリダはこれを「仕事の前倒し、人生の先送り」（p.201）と形容している。彼らにとり、家事を含む生活機能は全て、対価によってサービス・クラスから購入可能なものに他な

らない(pp.88-89)。

日本の男女共同参画社会は、女性の継続・再就業の困難さや、男性正社員を中心とする長時間労働や有給休暇の未消化の増加（男女共同参画会議少子化と男女共同参画に関する専門調査会 2006, p.2）といった表面的な現象を問題にし、各種育児休暇制度の普及、保育所の充実や保健サービス強化を併行したうえで「ワーク・ライフ・バランス」政策を掲げてきた。しかし、本書の議論を踏まえれば、この政策は右手で相手の頬を叩きながら左手で握手を求めるようなものになりかねない。

先進国における男女共同参画社会とは、男女がともにクリエイティブ・クラスとなる社会である。彼らが自らの市場価値を維持するため、コストやリスクとしての結婚や出産・育児を選択しなくなるのは必然である。この現実認識なしに、先進国が共通に抱える出生率の低下傾向に歯止めを掛けることは困難であろう。

参考文献

- 天川潤次郎 1984. アメリカ小売業界におけるユダヤ商人. 関西学院大学経済学論究 38(3): 521-541.
- 石戸光 2007. 地球規模の公共経済哲学を見据えて：異質な他者との対話の可能性. 公共研究 4(2): 105-122.
- 内多允 2006. 米国ヒスパニックの経済力と対中南米送金. 季刊国際貿易と投資 65: 22-38.
- 鈴木輝二 2003. 「ユダヤ・エリート—アメリカへ渡った東方ユダヤ人」. 東京: 中央公論新社.
- 男女共同参画会議少子化と男女共同参画に関する専門調査会 2006. 「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）を可能とする働き方の見直し」について. 内閣府男女共同参画局.
- 野村達朗 1984. ニューヨーク市ローワー・イースト・サイドのユダヤ人ゲッター. 札幌学院大学人文学部紀要 36: 67-85.
- 橋爪紳也 2002. 「集客都市 文化の「仕掛け」が人を呼ぶ」. 日本経済新聞社.
- F. ゴーブル著・小口忠彦訳 1972. 「マズローの心理学」. 東京: 産能大学出版社.
- 堀邦維 2000. 「ニューヨーク知識人—ユダヤ的知性とアメリカ文化」. 東京: 彩流社.
- R. パットナム著・河田潤一訳 2001. 「哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造」. 東京: NTT 出版.
- 渡部薫 2004. 文化による都市再生と創造都市—その史的解釈の試み—. 社会文化科学研究 8: 109-116.
- Coleman, J.S. 1988. Social capital in the creation of human capital. *American Journal of Sociology* 94: 95-120.